

國學院大學學術情報リポジトリ

上杉景勝の権力形成と家臣団

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 上杉景勝, 大名権力, 越後国人領主, 山崎秀仙, 上杉一門 キーワード (En): 作成者: 金子, 智紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001661

論 文 要 旨

学籍番号	233305	氏 名	金子智紀
論 文 題 目： 上杉景勝の権力形成と家臣団			
(内容の要旨) 本論文は、上杉景勝の家中の動向や構成の変移から、景勝の権力形成について論じた。 上杉景勝の権力構造について、天正六年の御館の乱直後においては、上杉一門・国衆（国人領主）・謙信旗本・景勝直臣の上田衆との複合的構造であったが、天正9年4月の河田長親の病死と同年9月の直江信綱・山崎秀仙の惨殺事件後に政権中枢は上田衆が台頭し、上田衆による領国支配が確立したといわれている。 先学では、景勝の家中について、上田衆を中心に景勝の領国支配や権力構造が明らかになっている。一方、謙信期以来の家中については、景勝の発給文書様式の視点から景勝の恣意によって排除されたと指摘されるが、その動向や景勝との関係性など不明瞭な点が多い。 よって、本論文は、謙信期以来の家中である越後国人領主・奉行人・上杉一門について、それぞれの動向や景勝との関係性の検討を通し、景勝の権力形成の過程をより具体的に明らかにすることを目的に論じた。 検討を通し、景勝の権力形成の過程には、上杉氏の領国支配を脅かす情勢が常に続いており、それに対応した体制を構築することが迫られていた実態が背景にあった。そのため、景勝は中枢を担っていた軍事力を有する越後国人領主を戦線の前線に派遣し、空いた中枢には謙信期以来の山崎秀仙を参画させつつ、自身の近習である上田衆も加えることで、景勝は権力体制の確立を試みた。山崎秀仙死後は、縁戚関係にある一門の上条亘順に対し、諮問を行って発言権を与えつつ、軍事権や仕置を執行する責任者の地位にすることで、自身を支える者として大きく登用した。 しかし、即席で作上げた権力体制であったため、新発田重家の叛乱を招き、また、亘順は景勝が形成した一門の支配体制から逸脱しており、発言権や軍事権を有したまま、ほかの上杉家中よりも上位に立つ異質な状態であった。 以上のことから、景勝の権力形成の過程において、景勝の恣意による越後国人領主の排除と上田衆による中枢の独占との評価は疑義的であり、あくまで暫定的な戦時体制の構築過程であったと考えられる。謙信期以来の家中は、蔑ろにはされておらず、十分に景勝は活用しつつ、不足点を上田衆で補っていたのが、当該期の権力体制の実態であったと考えられる。 このような流れから、次第に暫定的であった上田衆による権力体制が確立していき、領国支配の安定と豊臣大名に変貌することで、景勝の権力体制が完成された。			
キーワード（5語） 上杉景勝 大名権力 越後国人領主 山崎秀仙 上杉一門			